



一貫コース通信

気候変動から考えること

春は私にとって一番好きな季節である。厳しい冬を耐え凌いだ樹々が一斉に芽吹き山々を萌黄色に染める光景は「はじまり」という前向きな気持ちにさせてくれる。桜の花も素晴らしいが、多種多様の植物がお互いの生命力を誇示するような萌黄色の競演がより魅力的に感じるのである。そして、すべての生命にとっても、この季節は過ごしやすい、活動しやすい時期を迎える。何をするにも最適な季節なのだ。

その季節にも昨今、変化の兆候が生じている。連日暑い日が続いている。5月でありながら、夏日になる日が珍しくない。この傾向は年々強まっており、朝晩の寒暖差が大きく、体調を崩す人が少なくない。寒暖差20℃はなかなか身体に堪(こた)える。

さて、この連日の暑さは農業を生業にしている方にも深刻な影響を及ぼしている。種から野菜の苗を生育させる場合、発芽した後の数日間の気温がその苗の生育に影響を与えるそうである。それは、芽吹いたばかりの成長著しい期間は外的なストレスに弱いことが要因で、その後の成長にも大きく影響するようだ。我が家のブルーベリーは、今年開花した頃、気温が低い日が数日続いた。その影響なのか、例年と比較し綺麗な花が少なく、実がついた数が少なかった。気象等の外的な要因により生育に左右される植物の繊細さに改めて触れる機会となった。同様に稲作を例に挙げると、気温上昇が与える影響は深刻である。稲作ではお盆の頃に気温が高くと、でんぷんの蓄積が正常に行われず、米粒が白く濁ったようになる現象が生じる。これは「白未熟粒」と呼ばれる品質低下で、農林水産省によれば、稲穂が出て約20日間の平均気温が26~27℃以上になるとその割合が増加するそうだ。米の等級低下は農家の収入に直結する深刻な問題である。そのため、風通しを良くして温度を下げるなど、自然を相手にでき得る工夫を行うそうである。しかし、対処療法的な対応にはどうしても限界がある。そのため現在では暑さに強い品種への改良が研究され実証栽培の結果、成果が表れてきている。私達がこの暑さを身近に感じる中で、今後更に深刻な影響を受ける産業分野では地球沸騰時代を見越して、様々な研究が盛んに進められている。

先日、TBS系『世界遺産』という番組でキリマンジャロ国立公園～赤道直下の氷河～という番組を目にする機会があった。アフリカ最高峰のキリマンジャロ山(5895m)の氷河の定点観測VTRにより、現在は僅かばかりが残るという変遷の記録であった。山々がもたらす水の恵みが山麓に広がる樹林帯の生物多様性の維持や人々の生活に大きな恩恵をもたらしていることが良く理解できる内容であった。いつまでもこの恩恵が享受できることを祈るような気持ちで見ていた。今から数十年前、世界の気温は緩やかに上昇すると予想されたのだが、その警鐘も空しく現在に至り、それが現実のものとなっている。そして昨今、気候変動が要因であるとされる前例のない被害をもたらす気象現象が世界各地で頻発している。例えば、ブラジルのアマゾン河北部周辺地域での観測史上最高の干ばつ被害や、亜熱帯性乾燥気候であるアラブ首長国連邦での洪水被害による空港閉鎖は記憶に新しい。そして、日本でも痛ましい尊い人命が失われるような自然災害のニュースが後を絶たない。これからの未来、気候変動の波に抗(あらが)うことは難しいかもしれない。しかし、難しいからといって何もしないのもいかなものだろうか。数十年後の未来を考える機会にしてほしい。